

「全体的な計画」

—学びあい響き合い育ち合う—

社会福祉法人 なちじんむい

あめそこ保育園

改訂1版

ひとつの力がもうひとつの力を制御することはあっても

その力を創出することは決してない

それぞれの素質のなかにのみ自身を完成させる力が宿っている

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

〈目次〉

1 学び合い響き合い育ち合う「なちじんむい」全般的な計画 …p.1

2 「なちじんむい」「あめそこ保育園」の社会的立場 …p.2

♪ 設立趣意

♪ 保育理念

♪ 保育園の在り方「共同で築く子育ての場・出会いの場」

♪ 保育者の姿勢・役割「学び合いの場・育ち合いの場」

3 「あめそこ保育園」の基本保育と目標そして計画 …p.8

♪ 異年齢保育について

♪ 「わらべうた」を通した学びとあそび

付録 「各年齢の発達特徴表」と「保育園で過ごす1年」

1 学び合い響き合い育ち合う 「なちじんむい」 全体的な計画

この「全体的な計画」は、「なちじんむい・あめそこ保育園」の保育理念・方針・目標の内容を表現したものです。先人が築きあげた保育や教育、そしてコミュニティの歴史と文脈に参加すること。その土台に私たちの日々の行為（保育実践）を積み重ね、村の保育文化をかたちあるものへと描いていきたい。

出会う大人と子どもで語り合い、分かち合い、深め合って、新しい意味の発見や創造を加えていく。この「全体的な計画」は、あめそこ保育園が理想を追い続け、成長し続けるための指針です。決して完成することのないガイドブックで在り続けたらと考えます。

毎日の保育・生活・教育を通し、地域が繋がるものとしてこの「全体的な計画」が活かされれば幸いです。私たちは、保育と教育の環境を整えることで、家庭の状況や地域社会の環境と向き合い、子どもの最善の利益を問い合わせ続けます。

地域で興す「共同の子育て文化」を支える指針。過去と矛盾のない実践を通してプラスアップされ、しだいに整っていく「全体的な計画」。決して完成することのないこの冊子が、いつのときも新鮮でリーダブルに存在し続けることを願います。

2019年 3月

4月を待ちわびた日の午後
元気いっぱいの子どもたちの姿を思い描いて

2 「なちじんむい」「あめそく保育園」の社会的立場

♪ 設立趣意

今帰仁村の自然、歴史、人との関係性から生まれる保育環境は、この村の未来を築く土壌になると信じます。私たち「あめそく保育園」は、地域の共生が織りなす保育文化を創造し、今帰仁村の文化的成熟の一助になりたいと考えます。

子どもたちは、現代の抱える様々な問題（少子化、核家族化、地域の繋がりの希薄化、情報の氾濫、自己責任）のなかで、人や自然との関係性が薄れ、身体を通した実感が少なくなりました。子どもたち（大人も）にとって、どこか不自然な生活を強いられているような気がしてなりません。経済至上主義による効率化から、結果や成果を急ぐ風潮が子育てや教育の場に持ち込まれ、子どもたちの多様な育ち方が狭められている傾向にあります。成績や評価など、大人の設定したプログラムの通過基準に一喜一憂するのは大人です。保育と教育を目指すべきことは、その場で得られる結果（数値化できる成果）より、未来に開かれる過程こそが重要であると私たちは考えます。

教育の成果は、10年、20年先の長い時間軸を視野に入れる必要があります。脳科学では「安全基地」と呼ばれる心の領域が提唱されています。乳幼児期に豊かな愛情で育まれた精神には「安全基地」が育まれ、そこを拠り所に自己を信じ、挑戦する気持ちがいつまでも続くと考えられています。私たち保育者は、“育ちの豊かさとは何か”ということを常に問い続け、保護者や地域と連携し、子どもたちの自己肯定感、愛着形成を健やかに育む保育実践を発信し続けたい。子どもと大人が主体的に学び合い育ち合う関係性から、互いを尊重する。そのような「文化的多様性」が成熟した豊かな社会をこの場所から描いていけたら。あめそく保育園はそのように願っています。

♪ 保育理念

「共生と貢献」

人どうし・人と自然・そのほかすべての環境とのかかわりの中で育ち合うことを知り、互いを認め合い大切にし、他者の役に立つことを嬉しく感じ、よりよい社会づくりに貢献できる力を培い、みなで豊かに生きていくことのできる子どもを育てる

〈保育方針〉

「語り継がれるものの意味を再発見し、
あそびを通して学ぶことへの主体性を培う」

「信頼関係を築き、豊かな愛着形成のもと自己肯定感を育む」

「家庭と共に生活習慣の基礎を育み、
安心していきいきと過ごす日常を大切にする」

〈保育目標〉

「わらべうたや物語があふれだす
穏やかな生活の場をかたちにする」

「子どもも大人も主人公となり、
ワクワクと目を輝かせて遊びこむ時間を保障する」

「互いの感じ方考え方表し方を受け止め、
自ら判断し選びとる環境を整える」

♪ 保育園の在り方

「共同での子育ての場・出会いの場」

近所のおじいさん、おばあさん、おじちゃんにおばさん、そしておにいさんやおねえさん。あめそこ保育園は誰もが足を運べるところ。みんなの体験が集まって出会いが生まれ、響きあい、成熟できる場所でありたい。

「ひとりの子どもを育てるにはひとつの村が必要」

アフリカの先人はこの格言を残しています。様々な人が出会うことで影響し合い成熟する。そのような日常がこの場所であふれている。そして、みんなで持ち寄った大切な^{かも}ものから醸し出される空気が、子どもたちの身体にみずみずしく浸透してほしい。

あめそこ保育園が目指すことは、子どもたちの「情緒」が豊かに育ってほしいということ。その願いに尽きます。「僕は計算も論理もない数学をしたいと思っている」学生時代にそう言い放った岡潔(おかきよし 1901~1978)は、のちに「多変数複素函数論」の分野における「三大問題」に解決を与えた天才数学者ですが、彼は「情緒」について以下のように述べている。

「人の心をわたし、情緒という言葉を使っています。情緒が形に現れる。人は情緒を形に表して生きている。その情緒が形に現れるとき、喜びを感じる。それが生きがいです。真善美、みなそうです。例えばすみれの花を見るとき、あれはすみれの花だと見るのは理性的、知的な見方です。むらさき色だと見るのは、理性の世界での感覚的な見方です。そして、それはじっさいにあると見るのは実在感としてみる見方です。これらに対して、すみれの花はいいなあとみるのが情緒です。これが情緒とみる見方です。情緒と見た場合すみれの花はいいなあと思います」(『風蘭』より)

ひとくちに分かるといつても、その分かり方には幅があり種類があります。岡潔の言う「いいなあ」という見方には身体性（五感をひらく体験）が含まれている。(注1) その認識には手ざわりやぬくもりがあるように感じます。彼が見た数学における真理にはそのような手ざわりの感覚があり、いいなあと想える対象であったに違いありません。岡潔によると情緒は小学校、特に4年の頃までには個性として形つくられるそうです。そして「中学校高校では知性や意思が出来上がる」とも述べています。

あめそこ保育園では、乳幼児期は身体で世界を認識する情緒の形成にとってかけがえのない大切な時期であることを重視します。保育園で過ごす時代を、情緒が育つ大切な時期と捉え、身体性をともなう実感があふれる環境をつくりていきたいと考えます。発達の段階を考えると、身体性を飛び越えた脳の中でのみ認識される世界(インターネット・テレビ・ゲーム)には、岡潔の言う知性や意思が形になる小学校後半や中学高校の頃に経験していく方が良いかと考えます。

岡潔の残した数学史に輝く「第十論文」は高度すぎて、私たち凡人にはその偉業を理解し「いいなあ」と味わえない残念さもあります。しかし、いつの日かこの保育園の子どもたちのなかから、それを「いいなあ」と味わえる人材が生まれてくれたら最高だなと思う。数学に限らず、漱石、芥川といった文豪の残した文章。ゴッホやルノワールの絵画。バッハやブルックナーの音楽。沖縄の三線の音色。民芸。そして自然。歴史が残してくれた作品群に触れ「いいなあ」と想える感性は、乳幼児期に育まれた「情緒」が大切な鍵になる。私たちはそのように考えます。

* (注1) 「身体性をともなう認識」・・・身体を通して理解すること。たとえば、「腑に落ちる」などは、身体のなかから“了解した”というふうに問題や対象に対して自分の意識が身近になる実感があります。

♪ 保育者の姿勢・役割 「学び合いの場・育ち合いの場」

保育園は、子どもたちにとってたくさんのワクワクとドキドキに満ちている場所であって欲しい。この子にとっての新しい発見が毎日生まれる場所であって欲しい。そのための「きっかけ」を自然にさりげなく考え出し、そっと示すのが私たち保育者の役割です。

子どもたちはいつも新しいことを探しています。赤ちゃんがハイハイしながら目の前のものに触れ、その存在を確かめる。不安でいっぱいになりながらも自分の身体を頼りに坂道を少しずつ這い上がる。そして今まで見たことも聞いたこともないような新しい景色が広がる。そのたびに感性が広がり認識が変わる。

例えば、自分が目も見えず、耳も聞こえない、暗く混沌とした世界を生きていると仮定してみる。皮膚感覚を頼りに生まれて初めて「水」の存在を知り、暗い世界が「水のある世界」と「水がない世界」に分かれた瞬間。世界の枠組みがガラッと変わる感覚。あのヘレンケラー(1880-1968)はこの体験をどのような感動でくぐり抜けてきたのでしょうか。そのような感動体験の積み重ねこそ、乳幼児期には重要であると私たちは考えます。自分でこの世界をつかむこと。その感触はいまでも残り、いつの日か将来に立ちはだかる壁を乗り越えるための頼りとなる。そのように思います。

保育者は自らが差し出した「きっかけ」のなかで、そうなって欲しいという保育者側の答えに固執し子どもたちを誘導するのではなく、共に驚き一緒に進むことが大切です。心理学者の河合隼雄は『子どもの本を読む』の中で、大人が子どもの視点を持つことの大切さを繰り返し述べています。

「大人たちの現実認識があまりにも単層的で、きまりきったものになるとき、子どもたちの目は、大人の見るのとは異なった真実を見ているのである。われわれ大人の目は、常識というものによって曇らされている。子どもたちの透徹した（すきとおった）目は、異なった真実を見る」（『子どもの本を読む』より）

そのうえで、社会の中で生きる大人という存在が、子どもの世界に寄り添い、子どものそばにいるということの重要性を繰り返し主張します。気をつけなければいけないことは、大人が子どもになるということではありません。子どもの視点に共感しながらも常識の中で生きる大人が子どものそばに寄り添い、そこに居てくれているということ。その安心感は、子どもたちが主体的に世界と向き合っていくための拠り所となります。私たち保育者は大人の世界と子どもの世界を行き来し、子どもの成長を願い導く存在でありたい。そのためにも常識の質を高め、人として成熟し続け、社会に必要とされる大人になっていけたらと考えます。たくさんの答えを子どもたちと共に見つけられるように、保育者も目を輝かし続けたい。

世界は未知なるもので満ち溢れている。そのことに喜び、自ら新しい見方を発見し、混沌とした世界を切り開いていきたいという欲求。人は本来、学びたい、知りたい、変わりたいという衝動でいっぱいだとおもいます。それがいつしか“先生が隠し持っている正解を誰よりも早く探り当てることが能力の高さ”と査定されるような社会になってしまいました。そのような環境では、学ぶという行為から主体性が失われてしまいます。

しかし、この社会には、目標を設定し学び続け、成長し輝き続けている大人が少なからず存在します。彼らの世界をはかるモノサシは限りなく長くて広い。きっと乳幼児期に何度も体験した驚きや感動が、自身の「安全基地」そして「情緒」を豊かなものへと育んでいったのだと思います。大人になっても学びたい、発見したい、と新鮮さを求め続ける感性は乳幼児期にかたちつくられる。私たちはそのように信じます。

3 「あめそこ保育園」の基本保育と目標、そして計画

私たち大人は、知らず知らずのうちにテレビやメディアの過剰な依存へと陥ってしまいがちです。そのため、想像力が乏しくなり、目に見えぬものへの畏敬、人を敬う心、自然を慈しむ心が失われつつあるのではないでしようか。

しかし、子どもたちの感性はその失われつつあるものを強く求めます。自然の不思議さに開かれる心、他者と共に感じ繋がりあいたい心持ち、生き物に対する思いやり。昔話や物語の世界で想像力が豊かに育ち、素朴で美しい音楽にひたることで心は穏やかになっていく。子どもたちは、本来備わっている感性を今よりもさらに豊かにしようといつもいつも目を輝かせています。

「教育」の語源には「引き出す」という意味があります。私たちは子どもの内側にある主体性を引き出し続けたい。学びの成果基準が大人の尺度である限り、子どもたちの目は輝きを放つことはありません。主体的な遊びのなかから、学ぶことへ向かう心を自らの力で発見した時、その子の内面的土壌は豊かに耕され、何年か後の実りへと繋がるのだ信じます。

先生は、子どもに指示し目的を持たせるのではなく、子どもが自ら目的を見つけるようにと導く存在であってほしい。答えは隠して与えるのではなく、一緒になって発見するまでのプロセス・喜びを共有し合いたい。そのための手がかりとして、これまでのクラス単位で行われてきた画一的形式を乗り越える必要性を切実に感じています。

子どもたちの情緒を育む要素が保育園の日常にちりばめられている。そんなわくわくが尽きることのない「あめそこ保育園」であり続けるために。私たちは考え続けます。

♪ 異年齢保育について

あめそこ保育園では異年齢による保育環境を整えています。とはいっても、これまでのお昼寝後や土曜日の保育で異年齢保育のかたちのようなものは自然と実践されてきました。多様性に開かれた環境は、子どもたちの発達に寄り添える環境ともいえますし、様々な視点が交じり合い、柔軟な感性が育まれる土壌でもあります。

それでは「異年齢保育」とはどのような保育環境なのでしょうか。ひとくちに言い表すと「個々の発達に沿った環境を整え、子どもが自らの意思で活動を選びとり、互いに学び合えるようにすること」といえます。もちろん、年齢の異なる子同士で学び合う関係性から培われる思いやりなど、精神の柔軟さが育つ側面もあります。しかし、その他にも大切にしたいことがあります。例えば、0歳児に入園する4月生まれの子どもは、年度始まってすぐに1歳児となり、年度終わりには2歳児近くになります。夏頃に途中入園する0歳児とは活動要求が大きく異なります。ですから、一人ひとりの「発達に沿った環境」を用意することが「異年齢保育」で求められる大事な要素なのです。

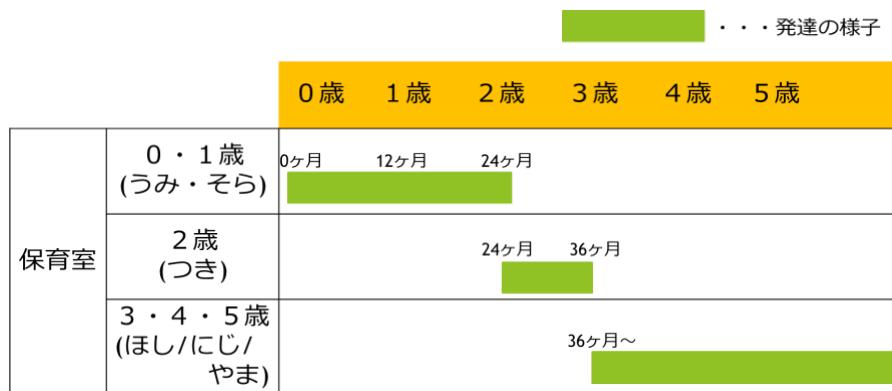
人は本来社会の中でよりよく生きることを強く求めます。そのためには様々な経験を通して思考力や感性、運動能力を高め、環境に適応するようになりたいという欲求に満ちています。そのため、一人ひとりの子どもたちがいま、どの発達の段階において、次にステップするために必要な手立てはなにかということを保育士は考え続けなくてはいけません。保育指針第2章「保育内容」では、「学び」を次のように捉えています。

「子どもは、保育士等によりその生命の保持と情緒の安定が図られ、安心感や信頼感の得られる生活の中で、身近な環境への興味関心を高め、その活動を広げていく。保育の目標に掲げる「望ましい未来をつくりだす力の基礎」は、子どもと環境の豊かな相互作用を通じて培われるものである。乳幼児期の教育においてはこうした視点を持ちながら、保育士等が一方的に働きかけるのではなく、子どもの意欲や主体性に基づく自発的な活動と

しての生活と遊びを通して、様々な学びが積み重ねられていくことが重要である」

『保育指針』より *波線はあめそこ保育園による。

とあります。以上の事から学ぶという行為には「自ら」という主体性が重要になるということが読み取れます。あめそこ保育園では、以下の図のように大きく3つの集団を形成し、それぞれにおいて柔軟かつ多様な「異年齢保育」を展開していきます。



日本では、小学校から初等教育が始まります。そこでは、先生ひとりが教壇に立ち、多数の子どもたちへと一斉に知識の伝達としての授業が行われています。そこにスムーズに移行できるようにと1970年代からの保育園では一斉授業ならぬ一斉保育が流行り出しました。しかし、それは同時に幼児期に大切な自発的な遊びから生まれる学びの機会を奪うことに繋がります。先に挙げたように現在の保育指針では「子どもの意欲や主体性に基づく自発的な活動」の大切さが着目されるようになりました。きっと人としての発達の過程を無視した早期教育の反省によるものだと思いません。現在では小学校でさえも「アクティブラーニング」(能動的に学ぶ)との重要性が推奨され、教育の内容が大きく変わろうとしています。「主体

的」であること。その重要性を社会全体で見つめなおす必要があるのだと思います。それでは、保育園で求められる幼児教育とはどのような内容なのでしょうか。「新宿せいが保育園」で異年齢保育を実践する藤森平司園長は「幼児教育」について次のように述べています。

「幼児教育は、子どもたちに知識を与える場所ではありません。将来、知識を受け取るための基礎を培う場所です。基礎を培うとは何か。一人ひとりの子どもたちの発達を、きちんと遂げさせることなのです。発達とは教師が教え、指導するものではありません。子どもが自ら行うことによってこそ遂げられるものです。けれど、子どもが自ら行うといつても放っておいてよいわけではありません。健やかに発達していくためにはその手助けとなる環境が必要だからです。保育者は小学校の教師のように知識を与えるのが役割ではありません。保育者の役割とは、子どもたちが十分な発達を遂げられるような環境を用意する事なのです。保育者が用意した環境のなかで子どもたちは遊び、生活をし、発達を遂げていきます」

(藤森平司著『0・1・2歳の保育』より)

夢中になり、遊びこむ環境のなかから、子どもたちはよりよく生きる術を周囲の仲間や大人から学びます。そこで得た術を皆で伝授し合い高め合う関係性を静かに立ち上げ、循環させていくのが幼児教育の基本といえます。一斉に何かを伝えるよりもはるかに複雑で柔軟な保育力が求められます。知性は個人で所有するものではなく、集団の中で発動されることを体感した子どもたち。大人になったら、多様性に満ち、他者を尊重する雰囲気があふれる社会づくりに貢献することでしょう。あめそこ保育園はそのように信じています。



♪ 「わらべうた」を通した学びとあそび

「わらべうたあそびには、子どもたちの発達を支え、生きる力を培う大切な要素が含まれ、優しい言葉と楽しいリズム、温かい雰囲気で子どもたちを包み、励まし落ち着かせ、学習の基礎となる穏やかな情緒の安定を育み、喜びを受け取るだけでなく、他者と分かち合うことを知る。子育てにおいて最も大切な「基本的信頼感」を、わらべうたではやさしく分かりやすい形で語られている。育児書のない時代から、子育ての知恵を語り継ぐ」

児童精神科医 佐々木正美

幼児期の終わりまで育ってほしい 10 項目は以下の通り。

- 1 健康な心と体
- 2 自立心
- 3 協同性
- 4 道徳性、規範意識の芽生え
- 5 社会生活との関わり
- 6 思考力の芽生え
- 7 自然との関わり生命の尊重
- 8 数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚
- 9 言葉による伝え合い
- 10 豊かな感性と表現。

私たちがいま、信念をもって取り組んでいる保育実践のひとつに「わらべうた」があります。物語の豊かな想像と詩想は子どもたちのみずみずしい感性に流れ込み、音律によるリズムが互いに作用しあうことで情緒は穏やかに育まれていく。その積み重ねにより子どもたちの内面が豊かに深まっていくことを、これまでの実践を通して実感してきました。「内面が豊かに深まる」とは先にあげた 10 項目が満たされていくということです。

私たちは、これまでの確かな手ごたえを頼りに研修を重ね、「わらべうた」からの恩恵を十分に受け取れるように、もっともっと技を磨いていけたらと考えます。

昔話や子守歌、わらべうたは祖先が語り継いだ子育てへの願いです。それは、時代が変わっても変わらない子どもに対する愛おしさを共有するための知恵でもあります。そのような歴史が脈々と受け継がれた教育文化に

参加すること。私たちは生まれながらにしてなにかと繋がっているという安心感。それがあってこそ自由で創造的な活動が生まれます。「わらべうた」を充実させることで、健やかに情緒と感性が育まれ、呼応し合い響き合う。そのような日常が、この保育園を文化的な場所へと導いてくれると私たちを考えます。

「心地よい木陰のある樹の下には叡智が宿る」

これもまた、アフリカの格言です。安心して過ごせる大きな幹の下で、緑の葉っぱの間からこぼれ落ちる光を受け止め健やかに育つ力。あめそこ保育園は地域に根ざす保育園として、子どもたちを見守る大きな木の象徴になっていきたい。

2018年に「今帰仁の杜」＝「なちじんむい」として立ち上がったこの社会福祉法人名は、今はまだ空語（未完成）です。たくさん的人が集い、主体的な活動が個人個人に保障され、情緒が磨かれる場所になっていきますように。子どもたちを中心とした豊かな日常が自然と「なちじんむい」をかたち創ってゆくことでしょう。地域のみなさんと一緒に「あめそこ保育園」をかたちにしていきたいとおもいます。どうぞゆたしくうにげーさびら。

2019年4月 春の日に寄せて

♪ でんでらりゅば ♪ でてくるばってん

♪ でんでられんけ ♪ でてこんけん

♪ こんこられんけん ♪ こられられんけん ♪ コーンコン

♪ ドドレミドーレー ♪ レミレスラーソー ♪ ドードレミード

♪ レーミソーミ ♪ ソーラソミード ♪ レミレドラーソ ♪ ドード



参考文献

- 『ヴェルヘルム・マイスターの遍歴時代』
ヨハン・ウォルフガング・ゲーテ著 (岩波文庫)
- 『風蘭』
岡潔 著 (講談社現代新書)
- 『子どもの本を読む』
河合隼雄 著 (榆出版)
- 『奇跡の人 ヘレンケラー自伝』
小倉慶郎 訳 (新潮文庫)
- 『保育所保育指針』
(全国保育士会 編) (全国社会福祉協議会)
- 『保育所保育指針解説』
(厚生労働省 編) (ブルーベル館)
- 『0・1・2歳の保育』
藤森平司 著 (世界文化社)
- 『琉球語の美しさ』
仲宗根政善 著 (ロマン書房)
- 『明鏡国語辞典』
北原保雄 編 (大修館書店)
- 『気になる子のわらべうた』 山下直樹 著 (クレヨンハウス)

今帰仁の色に濃くそめ
私共は郷土を離れて人間となることは出来ない
我々はこの自然とこの今帰仁の土地と
この社会が存在しなくては
人として生きることが出来なかつた
この翠、この清水、この海、
郷土の一切のものが深くしみついて離れない
将来、詩人として大成される方があるかも知れぬ
この美しい郷土の自然に触発された心がその詩を生む
その影像が生涯を支配して動く
音楽家になる方は郷土のあの三線の音が素養となる
大科学者になる人は、この自然を見つめた心が発展する
この今帰仁というのは世界に一つしかない
この土地が我々に与えられた唯一のものであつて
この自然をどう受け入れるかということは
我々にとってこれほど重要なことはないのである
関わりを持たねばならぬ、深く愛すること
もっとも偉大な今帰仁になれ
それ以外に諸君が偉大になる道はない

仲宗根政善 『琉球語の美しさ』 むすびより一部抜粋

MADE IN NAKIJIN